



「メディアの方に知っていただきたいこと (遺伝子組換え作物・食品)」の策定と公開

佐々 義子

メディア向けガイドラインとは

研究・開発に関わってきた方の中には、メディアの取材に応じても、「言ったことの一部しかとりあげてくれなかった」「リスクを声高にいう記事にされてしまった」という経験を持つ方が少なくないようだ。その結果、メディアが発信する情報は「科学的根拠に基づいていない」「情緒的である」ということになる。しかし、メディアの中にもこのように認識されていることを残念に思い、最低限の知識を持って取材に行こうと呼びかけている方たちがいる。小島正美氏(毎日新聞)はそのひとりで、著書「こうしてニュースは造られる」の中で「記者が取材するとき知っておくべき情報」「デスクが記事をチェックするとき使える情報」をメディアガイドラインとしてまとめることを提案している。

ガイドラインの内容

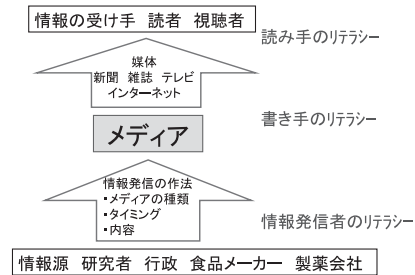
ガイドラインが必要なのは、メディアだけだろうか。研究成果を発信する研究者や研究所の広報官も、記事を読む一般市民も、情報発信用のガイドやリーダーズガイドがあっただけでは不十分だろうか。それは、情報発信、情報の加工(記事の作成など)、情報の理解のそれぞれのステージに、それぞれのリテラシーが必要であることと対応している(図)。NPO法人くらしとバイオプラザ21は、メディアや情報発信者をガイドする立場にはないが、私たちが記事を読むときの拠り所として、科学・技術が専門でないメディアの方にも使ってもらえるような「メディアの方に知っていただきたいこと(遺伝子組換え作物・食品)」を作成し、2011年4月に公開した(<http://www.life-bio.or.jp/topics/topics461.html>より、PDF版をダウンロードできる)。コンパクトで使いやすいように、全24ページとし、初めの2ページにサマリーを作った。取材に応じると名乗って下さった研究者のメールアドレスを掲載した。これは米国のIFIC(International Food Information Council)の活動を真似たもので、IFICではいろいろな分野の専門家のリストを分厚い冊子にしてメディアに配布していて、このリストに掲載することは研究者にとっても名誉となり協力を得られているようだ。取材先が増えれば、研究者の負担も軽くなるし、いろいろな研究者のコメントが紹介されることになる。

ガイドラインの利用とこれから

策定作業の中でメディアの方の意見を聞きながら感じたことは、遺伝子組換え作物・食品について十分な知識を持たないメディアの方が多いことであった。「メディアは遺伝子組換え作物・食品を危険だとは思っている」と感じている専門家が多いが、実際には、遺伝子組換え作物・食品を危険だと思っていないメディアもかなりいることがわかった。

メディアの方に言わせると、調べようとすると、目につくところに公開されている情報には、遺伝子組換え作物・食品をネガティブ捉えているものが圧倒的に多いという。そして、メディアの取材によく応じてくれたり、情報提供をしてきた

情報の流れ



りする人たちの多くは遺伝子組換え作物・食品に対して慎重な考えを持っているとのことであった。

同様に農業、食品添加物などの分野についても情報の取りまとめが必要であると考え、2011年度は食品添加物編、医薬品の副作用編の策定に着手した。「メディアの方に知っていただきたいこと」はできあがったら使命が終わるのでなく、存在を知っていただき、使っていただくことが重要なのである。前述のメディアガイドラインは、メディアとの意見交流会、シンポジウムでも紹介しており、毎月、くらしとバイオプラザ21のホームページに多くのアクセスがある。増刷のスポンサーも見つかり、学校の教材、講演会資料など、広く活用していただいている。

もうひとつ、ぜひ、皆さまにご協力いただきたいことは、今回の冊子は完成版ではなく、「メディアの方に知っていただきたいこと」を進化させていくために、いろいろなご意見やご指導を頂くことである。今後、ホームページで公開しているバージョンはどんどんリバイスしていきたい。

関係者とメディアとの交流

「メディアの方に知っていただきたいこと」をご活用いただくことはありがたいことであるが、さらに情報発信者、メディア、読み手の交流を進めていくことも不可欠であると考えている。

たとえば「食品の安全報道ネットワーク(FSIN)」では、不適切な報道に対して、意見を述べたり、編集者に質問状を発表したりしている。FSINのホームページ¹⁾には、質問状とその対応が報告されている。出版社と唐木英明FSIN代表(当時)が意見交換した記録も公開されている。「メディアドクター研究会²⁾」といって、医療に関する記事を評価しているグループもある。

このような動きは、「情報発信者は言われればなしで泣き寝入りせざるを得ない」という関係を払拭するだろう。この冊子が信頼関係のうえに情報交換できる新しい関係づくりのきっかけになることを期待している。

- 1) <http://sites.google.com/site/fsinetwork/>
- 2) <http://mediadoctor.jp/menu/about.html>

